なきごえ

1976

8

大　阪　市
天王寺動物園協会

動物と私

八木禧昌

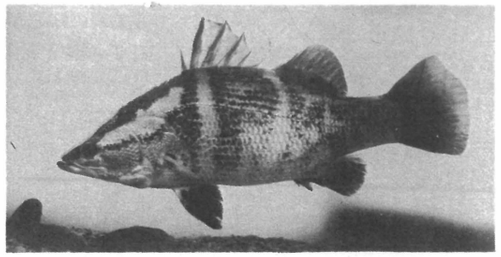
アカメを手放してもう2ヶ月になります。それまでの4年6ヶ月というものはそれこそ必死の思いでこの魚を育ててきましたので、居なくなりますと急に索漠とした雰囲気に包まれて、しばらくは羅針盤を失った船が漂流するように虚ろな日々でした。

そして、おかしなことに、それ以後たてつづけに体の調子をくずしてしまったのです。アカメという魚に、想像以上に心の深いところで打ち込んでいたんだなぁ、と我ながら驚いている次第です。

知らない人が聞けば、たかが魚1ぴきになんてざまだ、と嘲笑されるかもわかりませんが、特定の生きものの育成に傾注されたことのある人なら、わかっていただけるのではないでしょうか。ともかく、これまでは、アカメの世話で日曜もろくに休んだことがありませんので、病気などになっている余裕がなかったのかもしれません。いままでの張りつめていたものが急にゆるんで蓄積疲労がどっと出てきたのでしょう。生きものを飼うのもよろしいが、力みすぎてはどこかにヒビが入る、そんな教訓を、いま苦々しく味わっているわけです。

さて、アカメという魚のことを少しご紹介しましょう。れっきとした日本産の魚ですが、分布が宮崎県、高知県、まれに徳島県で見られる程度で、しかも汽水域にしか出現しませんのであまり広く知られている魚ではありません。しかし、すこぶる成長率の高い魚で、大きいのは1.5㍍にも達するといいますから日本の沿岸魚の中では横綱級と申せましょう。熱帯に仲間を持つ肉食魚（フィッシュイーター）(Fisheater)で、形はスズキとクロダイをたして2で割ったような感じです。その名の通り、熱帯の血さながらルビーのように光る目の色が特徴で、面がまえも、猛魚の名をはずかしめない古武士のごとき迫力があります。

この魚を、大阪の空の下で、しかもアパートの狭い一室で飼うことになる、などということは思いもしませんでしたがこと魚のことになると、分不相応なる好奇心をもつ私ですので、アカメへのアプローチはずいぶん以前から深く静かに潜行させていたことは事実でした。その願いが、思いがけなく実ったのですから大変でした。体長7㌢のアカメの稚魚を、高知県中村市四万十川河口の研究家から頂戴した時の感激は、とうてい筆舌に尽せるものではありませ



んでした。有頂天という言葉は、まさにあの時のことをいうのでしょう。

それからというものは、私の家の生活サイクルがアカメを中心に回わりだしたのです。50数ヶ月におよぶこの魚との付合いを語ればそれこそ枚挙にいとまがありませんが、何よりも苦心したのが生きたエサの調達でありました。エサははじめのうち池エビで、半年ほどしてからオイカワや小ブナ、モロコなどを好んで食べるようになり、日々に数多く与えねばならなくなりました。車をもたない私は、専ら電車とバスに揺られて、長グツ、バケツ、アミという判じ物のような格好で東へ、西へ…。

飼主が、毎日遊んで暮しているならともかく、文字通り〝火の車〟ともいうべき生活の渦中にありながら〝浮世ばなれ〟のエサ取り作戦を展開するのですから滑稽なことでした。

このような泣き笑いの1600日が流れて、とうとう今春、アカメは体長53㌢になってしまったのです。水そうは、2階借りの分際にとっては限界点を越えた120㌢でしたから、いつ床が抜けるか、それが第一心配でした。

ペットを計画性もなく飼うのは社会人としての良識に欠けている、という批判がありました。ライオンやワニなど、手に負えなくなると動物園へ持ち込めばよい、というマニヤの安易な考え方が問題となった時です。たしかにこれは正論だと思います。魚も同じで、本当は我が家の水そうで天寿を全うさせるにしくはないのですが、現実のタイムリミットが音をたてて迫ってくるようで、私はアカメに関する決断をせざるを得ない崖っぷちに立たされたのでした。

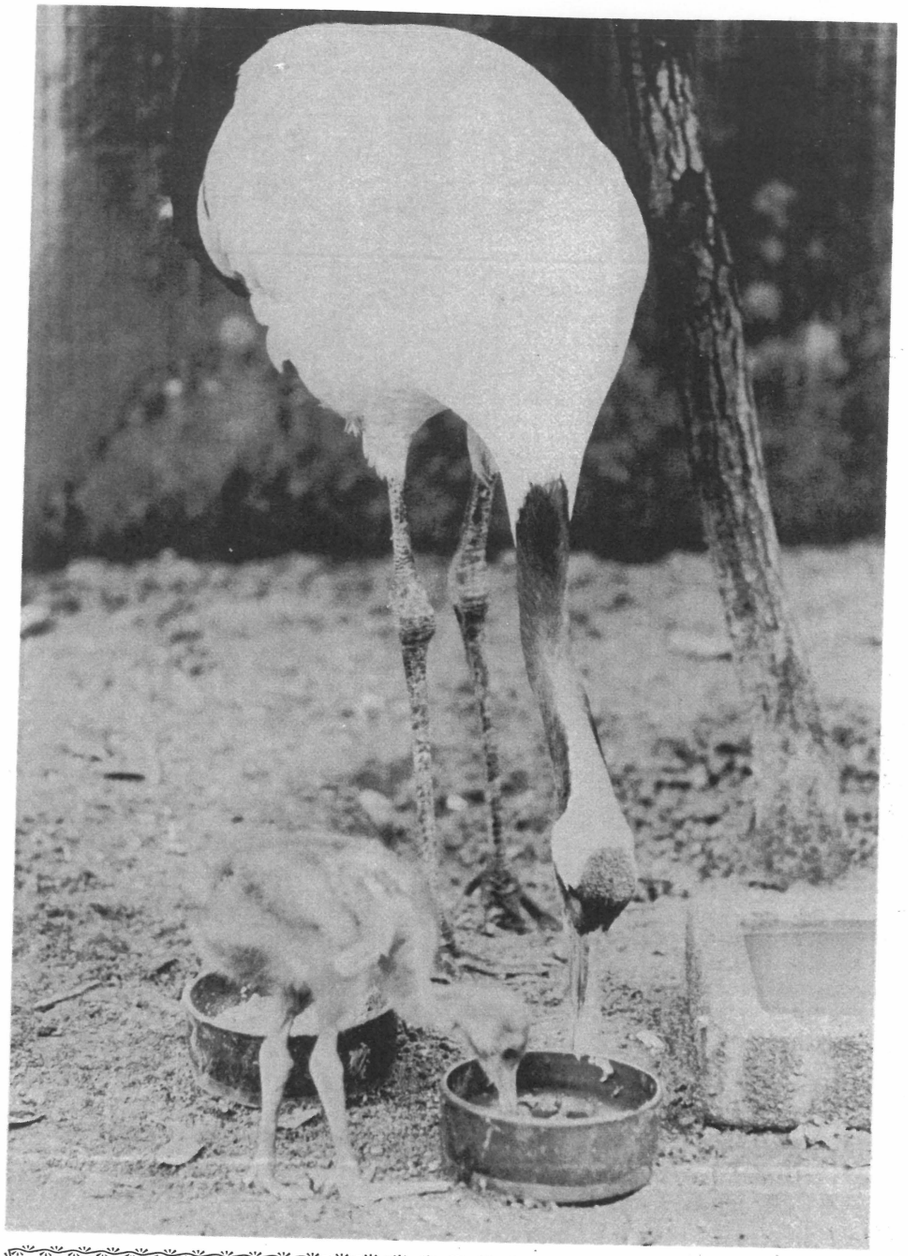
ところがどうでしょう、私達の心配をよそに、トントン拍子に〝良縁〟がまとまってアカメは5月12日、東京のよみうりランド水族館へ元気に旅立っていったのです。まことにアッケない別れでした。

いま、アカメは巨大な水そうに1ぴきだけ入れてもらって悠々と泳いでいるそうです。理解ある担当技師さんの愛情に支えられて、本当に幸わせものと申せましょう。

この夏、ン万円奮発して家中でアカメとの再会に上京する予定です。おそらく水そうに顔を寄せると、背ビレをふるわせて〝久し振りやなァ〟と向こうから声をかけてくれるでしょう。そんなバカな…と思われるでしょうが、少なくとも私たちにはわかるんです、アカメがいま何を言っているのか…。(月刊いそつり編集長)

なきごえ8月号もくじ

動物と私……2
タンチョウの誕生……3
動物園グラフ……4・5
ラマ成育記録……6・7
天王寺の動物たち⑯……8・9
獣医室から⑫……10
動物園ニュース……11



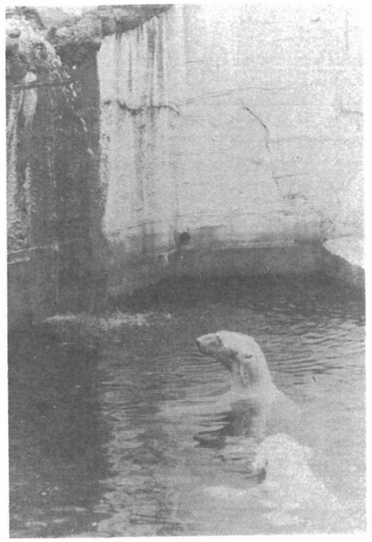
“タンチョウの誕生”

27年ぶりにタンチョウのヒナが1羽誕生しました。5月28日に産卵、6月30日にふ化したもので、ヒナはすくすくと育っています。この母親は一昨年8月に中国北京動物園から当園にお越し入れしたもので、日中親善交換動物の誕生第1号です。（撮影　宮下　実）

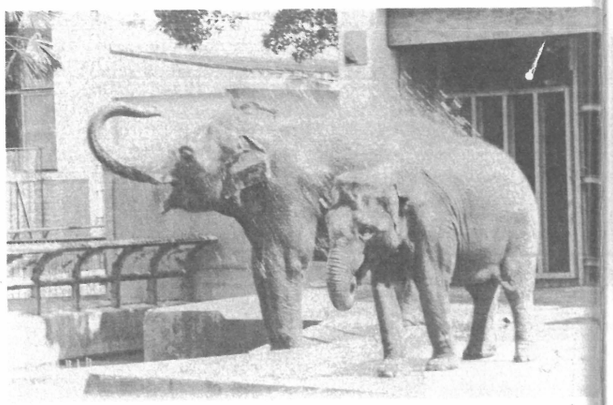
動物園グラフ

暑い夏も真盛り。今日は動物達の水浴シーンをご紹介しましょう。

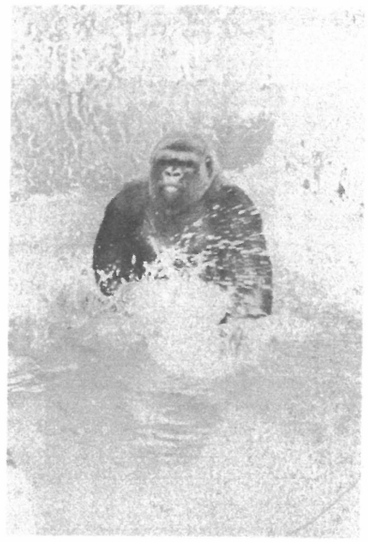
（撮影：宮下　実・長瀬健二郎）



↑ホッキョクグマ



↑インドゾウ

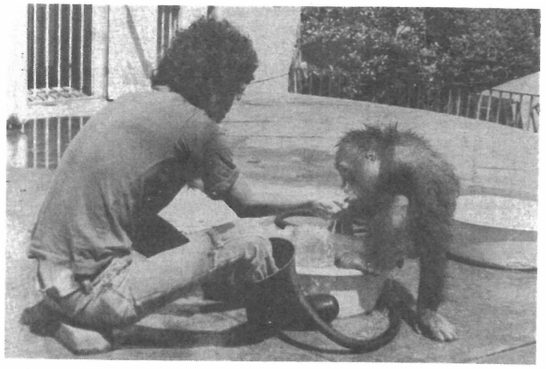


↑ゴ　リ　ラ

↑ヒ　グ　マ

↑バーバリーシープ

↑エミュー



↑オランウータン

6・7月の動物園日記

6／23．シロクジャクの♀が死亡しました。

24．アグーチが3頭の仔を産みました。

25．ハナジカが2頭目の仔を出産しました。

27．今年最初のフラミンゴのヒナがふ化しました。

28．3頭目のハナジカが産まれました。

30．タンチョウのヒナがふ化し、4頭目のハナジカが産まれました。

7／3．インドヒョウが2頭出産し、2羽目のフラミンゴがふ化しました。

4．シマウマが出産し、5頭目のハナジカが産まれました。前日出産のヒョウの仔1頭が死亡し、もう1頭も研究室に引き取り人工哺育しています。

5．鴨川シーワールドに一昨年生れのメスの仔を出オスをもらいました。

7．アグーチがまた1頭出産しました。

9．マゼランガンのオスが痛風の為死亡しました。

11．ピューマが3頭の仔を産み、エゾシカも1頭出産しました。3羽目のフラミンゴのヒナがふ化直前、水中に落ち溺死してしまいました。

16．エゾシカが2頭出産したのですが、内1頭は池に落ち溺死してしまいました。

17．エチオピアライオンの仔とライオンの仔が共に上まぶたを垂らし、食欲不振なので治療しています。飼育研究会が行なわれました。

20．ビルマのラングーン動物園との動物交換の為、キジ1番、タヌキ1番、アグーチ1番がビルマに向けて出発しました。

21．エゾシカがまた1頭出産しました。

23．ラングーン動物園からブラックタートル2頭、ムツアシガメ2頭、バインスネーク10頭が送られてきました。

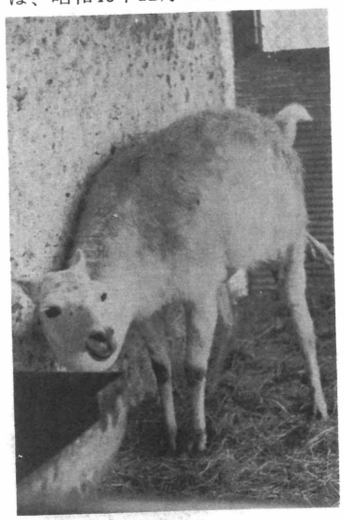
24．ニホンザルのメスが日射病の為死亡しました。

26．スプリングボックのオスが右前足を腫らせているので治療しています。

ラマ成育記録

丸本　守・蔭谷　文彦

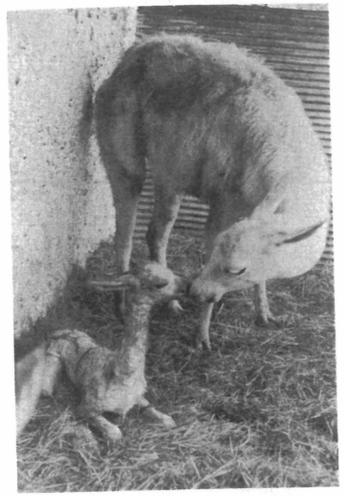
5月12日、午後3時、ラマ夫婦に待望の赤ちゃん1頭が、誕生しました。父親は昭和47年、3月31日当園に入園し、母親は、昭和49年12月20日、入園したものです。交尾は、昭和50年10月16日に確認されており、妊娠期間は216日と思われます。この母親は、昭和46年12月16日に仙台の動物園で生まれており、初産でした。



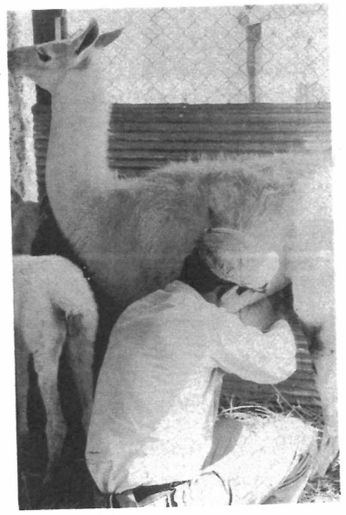
①分娩中の母親。
仔の前肢が少し見えます。

さて、出産に際しては、前日も、当日の午前中もその兆しは見られず、丁度、前日から、動物舎裏で工事をしていましたので工事音の為、急に産気付いたものと思われます。出産後、父親が母親の邪魔をする仕草が見られましたので、直ちに父親を柵で隔離しました。しかしながら、仔はなかなか母親の乳首に吸いつかず、その日は、母仔を観察するだけに終りました。仔は性別検査の結果♀でした。母親は初産の為もあってか、母乳の飲ませ方も下手な様で、仔も又、母親の乳首に吸い付く事が出来ず、係員をいらいらさせましたが、真白な柔らかな体毛で包まれた元気な赤ちゃんでした。この様な状態が続きましたので、13日には、母親を固定し母乳を3cc程度絞り取る事に成功、これを飲ませました。しかし、このままでは衰弱するので、ついに人工哺乳する事にしました。人工哺育を行なうにあたって、当園では、資料がありませんでしたので、他の動物園の例を参考にして、山羊乳、エスビラック、人間用粉ミルクを試験的に、いろいろ飲ませてみましたが、この結果、エスビラックは全く飲まず、山羊乳が最も良いと思われました。山羊乳は、都合よく出産したばかりの母乳の出ている個体を利用する事が出来ました。そして、山羊乳の出なくなった時の事を考え、市販乳との混合乳を与える事にし、除々に市販乳の割合を増して行く様にしました。仔はこの混合乳を、驚く程よく飲みましたが、飲み過ぎて変調を起こさぬ様に、哺乳量はセーブしました。15日頃には、親に付いて行ったり来たりし、よく動き回り、特に昼からの方が、活発な運動を行なっていました。18日の体重測定では、体重は15kgとなり、授乳も順調に行なわれ、20日には、乾草をもて遊んで、しゃぶる迄になり、発育も体調も順調に見えました。しかし、便のつまりがひどく、指で便を出してやらねば、便が出ない状態が続き、21日より、便秘の予防としてビオフェルミンをミルクに混ぜて投与しました。その後も便秘が続きましたが、26日には自力で排便しました。6月4日頃には、母親の乳首に吸いついたのを、偶然目撃しましたが、吸いつく回数が非常に多く、乳の出は良くないと思われましたので、人工哺乳は、今迄どうり続けて行なう事にしました。その後、6月5日から6日にかけて、下痢便が見られましたが、これは、この時点で、濃厚飼料を食べ出していた為と、思われました。主にフスマを食べていましたので、餌に多少多い目にフスマを混ぜて与える事にしました。8日には、砂浴びの仕草が見られましたので、砂を運動場に入れてやると、毎日の様に1日数回、砂浴びを行なっていました。11日頃より、徐々に人工乳を飲まなくなり、親の母乳を飲む様になりました。この様に、生まれてから、かなり日数が経過してから、母乳を飲み出した事は、当園でも始まって以来、かってなかった事で意外に思われました。これは母仔共に、同居したままで、人工哺乳を行なっていましたので、仔の成長に連れて、仔の母親への慕いと、母親の仔に対する、母性本能が偶然にも、よみがえったものと思われます。仔は、日増しに成長していますが、ラマという動物は元来、蒸し暑さに弱い動物ですので、今年の夏を乗り切るのが、当面のさし当たっての課題と思われます。

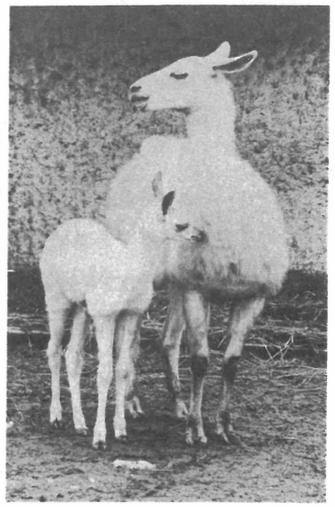
②少し助産してやりました。



③産まれた仔のにおいをかぐ母親。

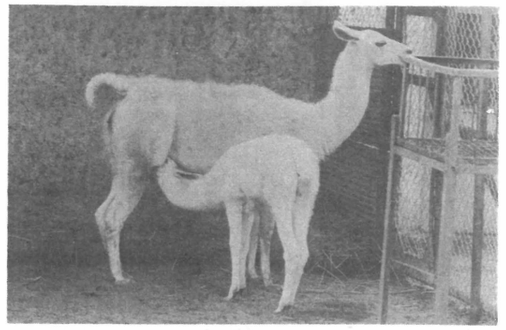


④人工哺育することにしましたが、母親のミルクもしぼって飲ませました。



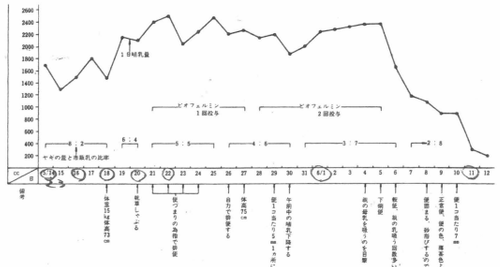
⑤生後15日目

⑥人工哺育中の仔ミミーちゃん。



⑦生後20日目、母親のオッパイを吸い出しました。

⑧生後60日目、ずい分大きくなりました。



天王寺の動物たち（16）

オオヅル

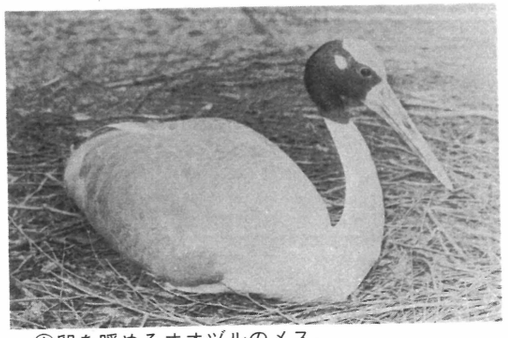
7月23日の朝、オオヅル舎のプールの底に割れた卵のカラが沈んでいました。オオヅルのヒナの誕生です。昨年に続き今年もヒナがかえり、このヒナがこのオオヅル夫婦の21番目のヒナということになります。

オオヅルはアジアに住む大型のツルで、主としてインド、ビルマ、タイ、そしてベトナムなどに住んでいます。また最近オーストラリア東北部でも見かけられるようになったそうです。それらの地方の水辺や湿原がオオヅルの生息地です。そこでオオヅルは色々な小魚、カエル、それに虫などの動物質と穀物や木や草の実といった植物質とを食べています。

現在、天王寺でのオオヅルの食事は、1羽につき小さく切ったコアジを1kg、ドジョウを300g、中米を300g、ニワトリ用の飼料を500gです。これで1日約500円位です。

オオヅルはタンチョウなどと並んでツルの中でも大きな方で、立つとオスもメスも大体大人の男の人位の背があります。そして翼を広げると2m以上にもなります。

「鶴は千年カメは万年」とか「鶴の一声」、「松上の鶴」、「鶴の髪」、「鶴の粟」などのようにことわざや言い伝えにしばしばツルが出てきます。これらは恐らく殆んどが日本のツル、つまりタンチョウがモデルでしょうが、アレ？おかしいぞ、と思われる言葉もよくあります。例えば「鶴は千年」ですが、もちろん1000年も生きられません。ツルの仲間はとても丈夫で長生きする鳥ですがそれでもせいぜい40～50年位です。



①卵を暖めるオオヅルのメス。

②7月23日に無事かえったオオヅルのヒナ。

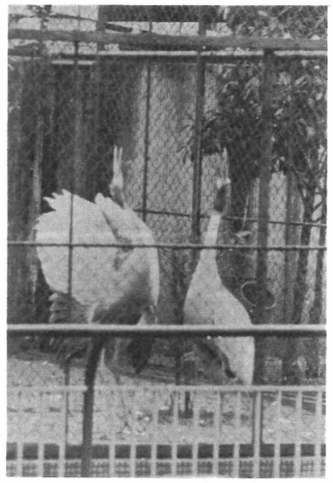
それに「松上の鶴」は全くのまちがいです。というのも、ツルは地上性の鳥で木の枝にとまったりしないからです。あれはニホンコウノトリをタンチョウと見まちがえたのでしょう。それからよく言われる「鶴の一声」ですが、一声で鳴くのは普通オスだけで、メスは二声づつ鳴きます。

オオヅル舎の左となりがマナヅル舎でそのとなりにタンチョウの夫婦がいます。このメスは2年前中国の上海市から贈られたものなのですが、これが5月28日に産卵しました。ツル達を担当している浅田さんは飼育係になって14年のベテランで、もうツルを6年も担当しています。浅田さんはタンチョウが産卵したころからオオヅル夫婦の様子が変ったのに気がついたのです。これは巣作りのまえぶれです。さっそく竹ぼうきの竹を小屋の中においてやると案の定、夫婦で一ヶ所にうまく竹を集めて巣を作りました。殆んどのツルがそうであるようにオオヅルも地上に巣を作ります。そして6月21日、とうとう卵を産みました。いつもだと1個目を産んだ2日か3日目にもう1個、計2個の卵を産むのですが、今回はどういうわけか1個だけでした。その1個の卵を夫婦でとても大事に暖め続けました。この卵はこの夫婦にとって25個目の卵です。梅雨があけ、いよいよ本格的になった夏の日差しの下で口をあけて暑さをしのいだりしながら夫婦交代で暖め続けたのです。

③初めはこうやって親からエサをもらいます。

そして7月22日の夕方、卵は内側から割れ始めました。ヒナが中からカラを一生懸命割っているのです。もう時々ピヨピヨという声まで聞こえてきます。

7月23日の朝、浅田さんは朝一番にオオヅル舎に行きました。いつものように朝はメス親が巣の上に座っています。ヒナは親の下にいるのかよく見えません。しかし、浅田さんはすぐ巣のまわり、プールの中、とながめました。ヒナがかえると親はカラをすぐ巣の外に捨てるからです。やはりプールの底にカラが沈んでいました。ヒナは見えませんがこれでヒナが無事かえったことがわかりました。



④一声で鳴くオス（左）と二声で鳴くメス（右）

その日の午後からヒナはヨチヨチ歩き始めました。2日目頃から親がクチバシにはさんでさし出すエサをついばむようにもなりました。それからはもうドンドン大きくなります。毎日観察していても午前と午後ではグンと大きくなっているのがわかる位です。夏が終わって秋も深まる10月頃にはこのヒナももう親達と同じ位の大きさにまで成長することでしょう。

⑤オオヅルの家族。
向うがお母さん、手前がお父さんです。

（飼育課　長　瀬　健二郎）

表紙の写真説明

“ホッキョクグマ”
北極地方に住むホッキョクグマにとって、日本の夏は大のにがて。毎日、暑さからのがれるためにプールにドボン！ヒャー気持ちがいいなぁ!!　（撮影：宮下　実）

獣医室から⑫

人工哺育

今年はどういうわけか、人工哺育の当り年です。4月にバーバリーシープ、5月にはラマを人工哺育しましたが、それに続いてトラ、ライオンが人工哺育中で、研究室の方でもフサオマキザル、ヒョウがそれぞれ人工哺育中です。今回はこの人工哺育中の動物について、その成長経過、苦心談などをのべてみることにしましょう。

①哺乳中のトラ

トラは5月18日に2頭生まれたのですが、翌日、母親が初産のためか興奮して1頭を咬み殺したため、残りの1頭（オス）をすぐ人工哺育にしました。このトラの仔は順調に育っていますが、生後20日頃より一時くる病になりかけ、カルシウム剤、ビタミン剤の投与により良くなりました。生後47日目より鶏肉を少しずつ与え始め、離乳までもう少しです。

ライオン（メス）は6月2日に生まれましたが、母親が授乳させないため、翌日から人工哺育にしました。ライオンの方は病気らしい病気もせず、すくすくと育っています。このライオンとトラはベテランの正木、池内両飼育係員が交代で育てています。

ヒョウ（メス）は7月3日生まれました。父親はクロヒョウで母親は普通のいわゆるハナヒョウですが、生まれた赤ちゃんは母親似です。このヒョウの仔も母親が育てないため、やむなく翌日より人工哺育にしました。ヒョウの仔はトラやライオンの仔とちがい、非常に爪が鋭いため、哺乳ビンでミルクを飲ませる担当者の手は傷だらけです。このヒョウは生後8日目に一度危とく状態になったのですが、抗生物質や栄養剤の注射でどうにか持ち直しました。しかしその後10日ほど下痢が続き、連日投薬を続けたところ、最近やっと良くなってきました。

②仲よく走り回るトラとライオン

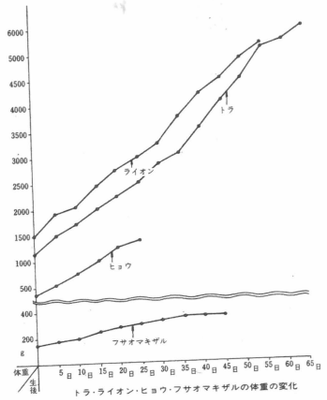
③ヒョウの排便をさせているところ。

フサオマキザル（オス）は6月14日に生まれたのですが、母親が抱こうとしないため、その日の昼から人工哺育にかえました。未熟児だったため最初は心配でしたが、順調に成育をしており、生後42日目から離乳食も少しずつ食べさせています。

④哺乳中のフサオマキザル

それにしても、動物のお母さん方、人間のまねをしないで自分の子だけはしっかり育てて下さいネ！

（飼育課　宮下実）



トラ・ライオン・ヒョウ・フサオマキザルの体重の変化

動物園ニュース

☆出産ラッシュ！オメデタあいつぐ!!

先々月号、先月号でもぞくぞく誕生する赤ちゃんをお知らせしましたが、今月号もそれに続く赤ちゃん誕生の話題をお知らせしましょう。

ハナシカが6月23日に1

ますが、一時食欲を失い心配しました。

☆タンチョウ、オオヅルの誕生

5月28日、タンチョウヅルが1ヶ産卵し、抱卵を続けていましたが、6月30日、かわいいヒナが誕生しました。タンチョウの誕生は昭和24年以来、実に27年ぶりのオメデタだけに大喜びです。このタンチョウの母親は一昨年、中国北京動物園から当園にお越し入れしたもので、日中親善交換動物の誕生第1号です。ヒナは日ごとに大きく育っており、入園者の方もあたたかい目で見守っています。又、7月23日には昨年に続き、オオヅルが1羽誕生しており、ツル舎は喜びのムードに包まれています。

☆フラミンゴ2羽ふ化

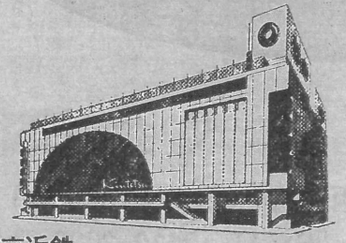
昨年7羽もふ化したフです。

夢が広がるショッピング……
近鉄がお届けします

上本町近鉄 TEL.(06)779-1231

アベノ近鉄 TEL.(06)624-1111

奈良近鉄 TEL.(0742)33-1111



東京近鉄

近鉄

休園のお知らせ

毎月第三月曜日は休園日です。8月以降の休園日は下記の通りです。

8月16日、9月20日、10月18日、

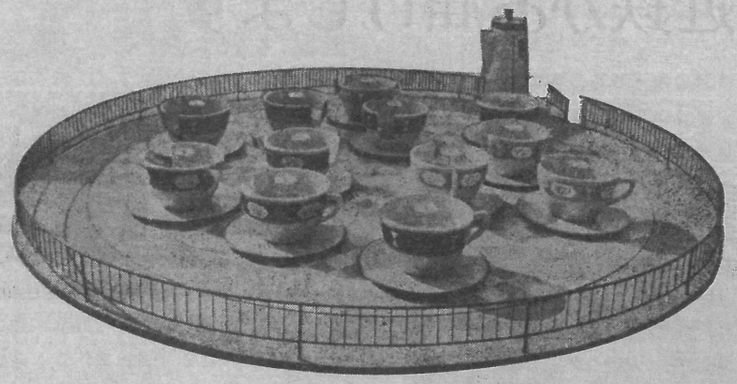
開園時間は9時半から5時までで、4時半に切符売り止めです。

獣医室から⑫

人工哺育

今年はどういうわけか、人工哺育の当り年です。4月にバーバリーシープ、5月にはラマを人工哺育しましたが、それに続いてトラ、ライオンが人工哺育中で、研究室の方でもフサオマキザル、ヒョウが

遊園施設委託経営・製作・販売

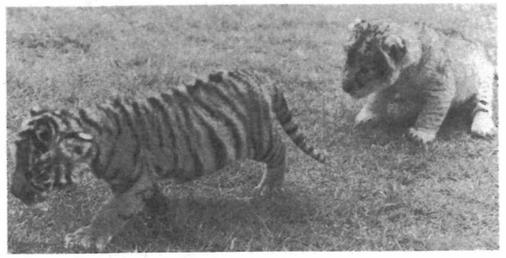


久竹娯楽株式会社

本社 工場 大阪市西区南堀江通3—40

電話 大阪(06)541—3112・3938番

仔も母親が育てないため、やむなく翌日より人工哺

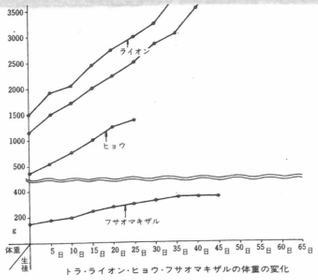


②仲よく走り回るトラとライオン

させています。

それにしても、動物のお母さん方、人間のまねをしないで自分の子だけはしっかり育てて下さいネ！

（飼育課 宮下実）



トラ・ライオン・ヒョウ・フサオマキザルの体重の変化

動物園ニュース

☆出産ラッシュ！オメデタあいつぐ!!

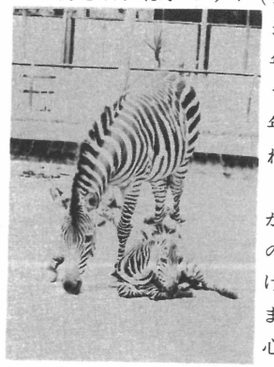
先々月号、先月号でもぞくぞく誕生する赤ちゃんをお知らせしましたが、今月号もそれに続く赤ちゃん誕生の話題をお知らせしましょう。

ハナシカが6月23日に1頭生まれたのを始めとして7月4日までに計5頭誕生しました。エゾシカは7月11日から7月21日までに計3頭しました。

アグーチは昨年も3頭生まれていますが、今年も4頭誕生し、すくすくと育っています。アグーチの赤ちゃんは生まれた時から目をあいて毛もはえており、すぐ元気に走り回ります。

7月3日にはヒョウが生まれましたが、母親が哺乳させないため人工哺育で育てています。

7月4日にはシマウマ（メス）が生まれました。シマウマはここ5年間、毎年1頭ずつ生まれるという順調な繁殖ぶりで、今年の秋にはもう1頭生まれる予定です。



7月11日にはピューマが3頭生まれました。この母親は2度目のお産だけにじょうずに育てていますが、一時食欲を失い心配しました。

☆タンチョウ、オオヅルの誕生

5月28日、タンチョウヅルが1ヶ産卵し、抱卵を続けていましたが、6月30日、かわいいヒナが誕生しました。タンチョウの誕生は昭和24年以来、実に27年ぶりのオメデタだけに大喜びです。このタンチョウの母親は一昨年、中国北京動物園から当園にお越し入れしたもので、日中親善交換動物の誕生第1号です。ヒナは日ごとに大きく育っており、入園者の方もあたたかい目で見守っています。又、7月23日には昨年に続き、オオヅルが1羽誕生しており、ツル舎は喜びのムードに包まれています。

☆フラミンゴ2羽ふ化

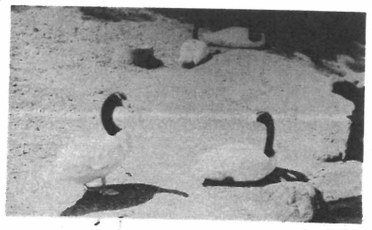
昨年7羽もふ化したフラミンゴは、今年は少々成績が悪く5卵産卵して、2羽ふ化しました。2羽共キューバフラミンゴで、たくさんの仲間に囲まれながら元気よく育っています。

☆アシカの交換

当園に居るアシカ8頭は全てメスばかりなため、昨年からアシカのおむこさんをさがしていましたが、千葉県の鴨川シーワールドの御好意により、やっとオスのアシカが入手できました。当園の2才のメスと鴨川シーワールドの8才のオスを交換したもので、このオスのシロ君、長旅にもめげず、当園の7頭のメスに囲まれて満足気です。

☆シュバシコウとクロエリハクチョウの交換

7月1日から全日空の大阪—仙台線が開設されるのを記念して、当園と仙台の八木山動物園との間で動物交換が行われました。当園のクロエリハクチョウは2羽共オス、八木山動物園のシュバシコウも2羽共オスなため、当園からシュバシコウのメス2羽を、八木山動物園からはクロエリハクチョウのメス2羽をそれぞれ交換しました。二世の誕生はどちらが早いか楽しみです。



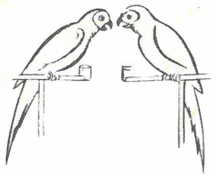
休園のお知らせ

毎月第三月曜日は休園日です。8月以降の休園日は下記の通りです。

8月16日、9月20日、10月18日、

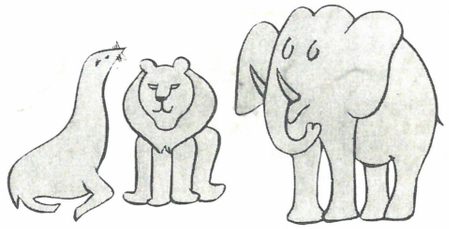
開園時間は9時半から5時までで、4時半に切符売り止めです。

なきごえ　昭和51年8月15日発行（毎月1回15日発行）第12巻第8号（通巻132号）
編　集／大阪市天王寺動物園
発行人／大阪市天王寺動物園協会　和田辰巳
印刷所／株式会社　松村善進堂
〒543 大阪市天王寺区玉水町2
電話　大阪（06）771－0201
振替口座　大阪　37823
定価100円（送料共）　1年継続（12部）1,100円（送料共）



鳥獣輸入

全国動物園水族館御用達



・医学実験用動物
・愛玩犬、猫直輸入
・宣伝用、テレビ用、貸動物
・教材用鳥獣剥製販売
・原色世界雑類図鑑（34種1枚もの）要郵便券150円・鳥獣価格表100円

有限会社　**吉　川　商　会**

本　社　神戸市生田区中山手通三丁目二八番地　電話（078）221-8195・221-1517
飼育場　神戸市葺合区神仙寺通三丁目一番地　電話（078）241-3494

自然の
おいしさ

全糖

●合成甘味料・合成保存料・合成糊料・合成着色料はいっさい含まれていません。

雪印ヨグール

パイン・オレンジ・ストロベリー・フルーツカクテル

各130c.c.＝90円

編集委員〈小谷　潔・林　邦彦・大野　尊信・米田　敏光・樽本　勲・中川　道朗・高橋　真三
深井　和美・野口　秀高・宮下　実・橋本　一郎・長瀬健二郎・農本　武志〉